
× 勇者 勇者（仮）

蜜 刈斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

×勇者 勇者（仮）

【Nコード】

N3754Y

【作者名】

蜜 刈斗

【あらすじ】

一人の勇者が死に、代わりとして、新しい勇者が選ばれた、が名前の間違いで、選ばれるはずだった者の弟のへたれな学生が勇者に選ばれた。

異世界トリップした主人公が魔王を倒すというありがちな話です。

始まりの切っ掛けの終わり

広大な平原には、鼻を突く血臭が漂^{ただよ}っていた。
普段のこの平原は、青々しい雑草が生^おい茂っているが、今は見る影もない。

焼け焦げた雑草、地面にあいた大きな穴、そして、夥^{おびただ}しい数の屍。
その屍の中に立つ、黒い花の模様がついた鎧を着た男が一人。

男は右を見る。

屍、屍、屍、屍、屍、屍、屍、屍、屍、屍。

数多くの屍で地面が見えない。

男は思わず目を背^{そむ}けた。

男が目を背けた先　そこにも同じような景色が全方位に広がる。

これでは目の背けようが無い。

追悼の意を込め、目を閉じた。

アーメン、と心の中で呟き、ゆっくりと　平原の静けさを感じな

がら　目を開いた。

だが、静まり返った平原の沈黙はすぐに破られた。

「ギヤアアアアアア！！！」

不意に響いたのは、耳を劈^{つんざ}く様な声。

それは人のものではなく、猛獣のような咆哮^{ほうこう}だ。

男は、ベルトにつけた鞘^{さや}から剣を抜き、身構えた。

男は構えたまま辺りを確認した。

前　いない。

右　いない。

後ろ　いない。

左　いない。

男は、耳と目を疑い、もう一度確認する　やはり何もいない。

だが、何も変わらなかったと言えは嘘になる。

男から見て、右斜め前、そこには巨大な影があった。

男は空を見て、顔を顰めた。

空には、翼を持ち、全身を黒い鱗で包んでいる、蒼眼の生物

ドラゴンと呼ばれる生物が目の前で羽ばたいていた。

全長は、十階建てのビルほど 到底、人間が一人で敵うとは思えない。

「ハハハ……」

男は笑った。

だがその笑いは余裕によるものではなく、諦めによるものだ。

「遺言ぐらい、誰かに聞いておいてほしかったな……」

男はそう呟き、目を瞑った。

ドラゴンは容赦をすること無く、男の頭を食いちぎった。

頭部を亡くした体は、音をたてて倒れ、周りの屍と、見分けがつかなくなった。

平原には、なおも血臭が漂っていた。

1 - 1 招かれざる勇者

いつか、何処^{どこ}かで、誰かが言った。

「疲れたら、空を見ろ」

兼木^{かねき}正大^{まさひろ}という青年は、誰かが言ったその言葉通りに、窓の外の空を眺めていた。

椅子に座り、机に向かい、黒い学生服らしき服を着ているところから見て取れるように、正大は学生だ。

正大の周りには、正大と同じ服を着た生徒が三十人ほど 正確に言えば、二十八人が、黒板と自分のノートを見比べながら、熱心に何かを書いている。

そんな中、正大は何もせず、ただただ空を見ている。

空に、何か変わったものがあるわけでもない。

況^ましてや、正大が空を見ていないといけないわけでもない。だが、正大はノートをとるところか、黒板に目を向けることさえしない。

黒板の前に立つ、眼鏡をかけた白衣の教師も、それを、見て見ぬふりをしている。

何故なら、正大にいくら注意しても、正大は何もしようとしないからだ。

が、正大は何もしようとしないだけであって、何も考えていないわけではない。

幼いころの思い出や好きな歌のことなど、その日その日で違うことを考えている。

今日は、昔、祖父に言われた言葉を思い出していた。

「人には、皆、平等に価値がある」

四歳のころだっただろうか、言われた時は意味の分からなかったこの言葉も、歳を重ねていくにつれ、意味が分かるようになってきた。

意味は分かったのだが、正大はこの言葉が真実とは思えなかった。

もし、この言葉が真実だとするならば、自分の価値を教えてほしい、と正大は思う。

数々の動物や植物の命を絶^たつて、それを食^{しょく}してまで、自分は生き長らえる価値はあるのだろうか。

自分に食われた命の価値以上に、自分は何かいいことを出来たのだろうか。

正大はそう考える。

だが、正大は自分に価値が無いと分かってても、死にたくは無かった。

何故なら、死ぬということは、生きている間に自分の価値を見つけたことが出来る可能性を、みすみす捨てる、ということになるからだ。

それが、何か損をした気分になるので、正大は死にたくなかった。

だが、正大は自ら自分の価値を見つけようとはしない。

もし、自ら努力したとしても、自分の価値を見つけられる可能性が百パーセントになるわけではない。

むしろ、現状より悪化する恐れがある。

ならば、自ら動かない方がよっぽど安全で、安泰で、しかも疲れない。

この考えが偏^{かたよ}っていることは分かっている。

だが、この考えを曲げる気はない。

「いつその事、世界が俺無しじゃ耐えられなくなってくれればな」

誰かに向けた訳でも無い言葉を、叶うはずのない願いを、誰にも聞こえない程度の声で呟いた。

空には雲一つなかった。

仄暗い部屋には長い机を囲むようにして椅子が並べられている。
その椅子一つ一つに人が座っており、空席は無い。
「皆、存じていると思います。が今回の戦争で約七千五百人が命を落
としました」

沈黙を破ったのは十歳程度の銀髪の少女だった。

顔立ちは恐ろしいほど整っており、整髪が生き届いた髪は甘い香りを漂わせる。

だが、この少女以外は大人ばかりだ。

強面の禿げ頭の男、気の弱そうな金髪の女性、浮ついた雰囲気^{うわ}を漂わせた長髪の男、顔触れは様々だが、銀髪の少女はどう見ても場違いだ。

机の高さに座高があっていないのか、唯一見える頭部も机に遮られ、向かいに座っている者からは見え隠れしている。

だが、誰も気にする者はいない。
故に、少女は続けた。

「命を落とした者の中には私の父上、母上、兄上もいます。そして

」

少女は涙目になりながらも、続ける。

「勇者様も、命を落としました」

その発言を機に場がざわめきだす。

「勇者までもが」

「魔王の候補が強すぎるのか、勇者が弱すぎるのか」

「静粛に!!!」

皆がざわめく中で声を荒らげたのは、銀髪の少女の横にいた眼鏡をかけた女性だ。

髪は黒髪で、瞳の色は、左は緑、右は橙と、左右で異なる。^{だいたい}

だが、その女性も動揺を隠せない様子で、頬には汗が流れている。

「なので、次の勇者を選ぶ必要があります」

少女は涙を堪えながら、少し声を張って言った。

「つまり、誰が勇者に適正か ということだ。皆、意見を述べよ」

黒髪の女性が少女の言葉を補足した。

ふと、机の端にいた長髪の男が手をあげた。

黒髪の女性は『申せ』の意を込め、頷いた。

それを確認して、長髪の男は口を開いた。

「確か、勇者になる条件って魔力を持たないこと、でしたよね」

「そうだ」

返答をしたのは禿げ頭のだった。

「でしたら、人間などはどうでしょうか？」

「ほう」

長髪の男が言った言葉に、禿げ頭の男が意味あり気に反応した。

そして、黒髪の女性がこう問うた。

「心当たりはあるのか？」

長髪の男は、その質問を待っていた、と言いたげに微笑ほほえんだ。

そして咳きこんで、「失礼」と言い、表情を戻し、真面目な表情で口を開いた。

「人間の世界にはボクシングという殴り合いがあるそうです。

その中のバンタム級という最重量級の選手たちの王者が兼木尚大たかひろと

いう者だそうです。

その者はどうでしょう」

長髪の男の言葉を聞き、黒髪の女性が口を開いた。

「人間の世界のことは良く知らんが、その者は強いのだな？」

「はい。」

少なくとも並の人間以上には強いと思われます」

「そうか、なら良い」

黒髪の女性が頷いた。

それを見て、気の弱そうな金髪の女性がこう言った。

「で、では、こ、これを持ちまして、えっと、き、き、緊急集会は終了です」

その言葉を機に、皆が立ち上がった。

皆、銀髪の少女に一礼した。

大人が一斉に少女に礼をしている、と傍^{はた}から見れば珍妙な光景だったが、気にするものは　少なくともこの場には　いなかった。

チャイムが響き、授業の終わりが告げられた。

正大は大きな欠伸^{あくび}をして顔を上げると、スカートとブレザーが見えた。

「兼木いつ!!!」

高い声で正大の名字を呼んだのは短髪の少女だった。

活発そうな目と、茶色い髪が良く目立つ。

少女の名前は逢瀬^{あつせ}美保莉^{みほり}。

顔はかなり整っていて、元気にあふれているので、男子はもちろん、女子からも人気だ。

「何だ？兄さんのことか？」

気^けだるそうに正大は返事をした。

「あんたのお兄さんはボクシングの世界チャンピオンになって、確かにすごいけど、今あたしが言いたいのはそんなことじゃないの」「じゃあ何だ？」

「あんた、授業中、ノートをとって無かったでしょ」「ああ」

正大の眠たそうな返事によって、少女の怒りのボルテージはあがっていく。

「あんたはそれでもいいの!!!？」

少女は声を張るが、正大は両手で耳を塞ぐ。

「ああ」

「何よ、折角^{せつかく}言っ^てあげてるのに、聞く気あるの!？」

少女が顔を真っ赤にして正大に怒鳴り散らす。

また始まった。

正大はそう思った。

二人の弟を持つ美保莉は、正大の行動を見ているとぐうたらな弟たちと照らし合わせて世話を焼きたくなってくるのだ。

だが、この行動はなぜか正大と弟だけにすることであり、正大と弟以外にはしない。

彼女は苛立ち以外に他の感情も混ざっていることに彼女自身は気付いていない。

尤も、正大にとっては不要であり、むしろ周りの男子から嫉妬の眼で見られるので悪影響なのだが、今ここで「やめてくれ」と言おうものなら、殺されるかもしれないから、極力、口には出さないようにしている。

正大はただただ来る質問に「ああ」で答え、事態の収束を待つだけだった。

「　　つてわけ、分かった？」

実は何も聞いていなかったが、ここは「ああ」と返事をした。

美保莉は話し疲れたのか息を整えている。

正大は美保莉が息を切らしているのを見て、息を切らすなら何も言わなければいいのに、と思ったが、口にするとまた話が長くなりそうなので心の中に留めておくことにした。

正大は窓の外を見た。

「最近疲れたら窓の外を見るのが癖になってきているな」と小さな声で呟いた。

だが、すぐに正大は目を細めた。

空の色が少し違う、そんな気がしたからだ。

実際に空の色は先程より少し暗くなっているが、不自然なほどではない。

頻繁に空を見ている正大だから気付けたことなのかもしれない。

不意に耳鳴りの様な、高い音が正大の耳を劈く。

正大は恐らくこの音の所為による頭痛に見舞われた。

「ぐ……」

思わずぐぐもった声が正大の口から洩れた。

「どうしたの、兼木っ!？」

美保莉は心配そうな顔をしているが正大にはそれを見る余裕すらない。

不意に、正大の体がビクンと大きく揺れた。

その後、正大が机に突っ伏したまま動くことは無かった。

石で出来た壁に囲まれた部屋の中には銀髪の少女がいた。

その部屋の唯一の出入り口である木で出来た扉は少し開いていて、そこからは眼の色が左右で違う眼鏡をかけた黒髪の女性と気の弱そうな金髪の女性が中の様子を覗^{うかが}っていた。

銀髪の少女は青く輝く円の真ん中に両膝をついて、何かに祈るように目を瞑^{つむ}り両手を合わせて何かを呟^{つぶ}いていた。

「ウロフィ ハラティ カミティ ダグラヴィ ウィクレウィ ク
ロミライティ」

お経^{きやう}の样にも聞こえるが、それとは異なる。

「い、今からやるのは、異世界と異世界を繋ぐ大規模魔法、『リンク』、ですか」

「そっだ」

金髪の女性の質問に、黒髪の女性は無表情な顔で銀髪の少女から目を離さないように答えた。

「で、では、ファイナ様が呟^{つぶ}いているのは、呪文ですか？」

「違う。」

あれは、『鍵』だ」

「『鍵』？」

金髪の女性は首をかしげた。

「自分の中に眠らせている魔力を自分の外へ解き放つ『鍵』を言葉にしたもの、つまり『キーワード』だ。」

『リンク』の呪文は他にある」

「つ、つまり、あれは魔力を出すための言葉、ですか？」

納得がいったような顔で金髪の女性は言った。

「そう。」

あれがファーンソン家にのみ許された、魔力を貯蓄する力、『魔力貯蓄』^{チャージエ}」

「えっと、でも、発動するには溜めている間、少しでも魔力を使っ
てはならないんですね」

「よく知っているじゃないか」

意外だ、と言いたげな顔で黒髪の女性が言った。

「べ、勉強しましたからね」

金髪の女性が微笑み、黒髪の女性もつられて微笑んだ。

そして二人はすぐに表情を戻し、再び部屋の中に視線を戻した。

「コアテリデイ ドルガリイ カベライティ」

そこで、銀髪の少女の言葉は止まった。

少しの沈黙が続き、銀髪の少女が閉じていた目を開く。

その刹那だった。

うごっつ！！

という轟音と共に暴風とそれに乗せられた石などが部屋をのぞいて
いた二人を襲う。

「ミリア、閉める！」

黒髪の女性は金髪の女性に、扉を指差して言った。

「は、はい！」

と返事をして、ミリアと呼ばれた女性は扉を閉じた。

扉はミシミシと軋むがそこそこ丈夫なようで、壊れる様子は無い。

『リンク・オブ・ゲート』

扉の奥から声が聞こえる。

恐らく、と言うより確実に、ファイナと呼ばれた銀髪の少女の声だ
ろっ。

その言葉を機に扉の軋む音が増す。

扉の隙間からは青白い光が漏れていた。

『リンク』兼木正大『

ファイナの声が再び聞こえる。

その声を聞いて、黒髪の女性がはつとした顔をして、慌てて扉を叩いた。

「ファイナ様！

兼木正大じゃなくて、兼木尚大です！」

『ええ！？』

扉の隙間から洩れていた光は青白い色から赤白く変わった。

扉は強度の限界に達し、ついには壊れた。

黒髪の女性はミリアを突き飛ばし、女性自身も飛んできた扉を^{かわ}躲した。

光は数秒ほどで収まった。

女性は体を起こし、ミリアに手を貸した。

「う、うう。」

あ、ありがとうございます、エルナ中尉^{ちゅうい}」

「そんなことを言っている暇があるなら、早く立て」

ミリアは出された手を^{つめ}呻きながら取り、体を起こした。

「さてと、召喚は成功してしまっているのか？」

「して『しまつて』いる？」

ミリアはエルナと呼ばれた黒髪の女性に問うた。

エルナは呆れ顔^{あき}で質問に答える。

「ファイナ様が名前を間違えなさったのだ」

「えっと、ファイナ様らしいですね」

「皮肉だな」

「そ、そんなつもりは無いですよ」

ミリアが少し慌てた様子で首を振った。

「まあその話は良しとして、ファイナ様が魔力を使い果たして倒れているだろうから、迎えに行こう」

エルナが部屋に指を差して言った言葉に、ミリアは頷いて、「はい」と返事をした。

二人が中に入ると、部屋の中ではファイナと学生服を着た男がうつ伏せに横たわっていた。

エルナは溜息をつき、

「成功してしまっていたか」と呆れ顔で言った。

「ファイナ様はミリア、お前が背負え。」

私はこの者を運ぶ」

エルナは男を転がし仰向けにすると、男の顔を見て、こう言った。

「こんなアホ面づらの奴が」

エルナは言いかけた言葉を途中で止め、

「まあ、人を見かけで判断するのは駄目だな」と頷いた。

1 - 1 招かれざる勇者（後書き）

一応書いておきます。

この物語はフィクションです。

登場する団体・人物などの名称はすべて架空のものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3754y/>

×勇者 勇者（仮）

2011年11月9日21時04分発行